
桜咲きほこる島の詩

カオス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜咲きほこる島の詩

【Nコード】

N8470M

【作者名】

カオス

【あらすじ】

これは理想を追い続けた

1人の少年衛宮士郎が

桜の咲きほこる島を

舞台におくる甘くて切ない物語である

始まる前のひとつの終わり（前書き）

今回は、士郎が初音島に
来た原因を書いて見ました

始まる前のひとつの終わり

それは、冬休みのことだった俺は、休みの期間を利用し外国で人助けをしていた。時には、この手で人を殺めたりもしたし救った人にも後ろから撃たれたり刺されたりもしたがそれでも救うことのできた人達に感謝され救った人達の笑顔を見ることができた。

そのおかげで俺は理想に絶望することは、なかったが魔術を秘匿するというルールをやぶらたびたび一般人の前で魔術を使っていたせいで

魔術協会から正式に封印指定をうけたのである

そのため俺のところには、数人の代行者が来て戦いになった

それを俺は、傷だらけになりながらも撃退することができたが・・・

・・・

「本当に行くのか士郎？たかが封印指定くらいなら、わしらが魔術協会を脅せばお前には、手出しは、できないだろうに」

「そうそう、私達がなんとかするわよ」

「そうだぞなんならお前用の人形を作ってやってもいいんだぞ」

「ありがとうございます。でも師匠達には迷惑は、かけられません。それに俺は大切な人達の日常を壊したくないんです。」

そう確かに人形に魂を移しかえれば代行者達に追われることは、なくなるだろうしかし衛宮士郎が目指しているのは、正義の味方であるだからこれからも魔術を使うことは、やめないだろう もしそれでまた魔術協会にばれたらどうなるだろう、

もしかしたら何も知らない士郎の友人や家族を人質にとるかもしれない

そう考えると人形に魂を移しかえてもあまり意味がない

「お前は、それでいいのか？」

「はい、確かにまだやり残したことは、ありますが

それでも大切な家族には、かえられません」

「そうかならば何も言うまいしかしフィリアは、どうする」

フィリアとは、助けた町にいたメイドで助けたお礼にとついてきてくれてこれまでに彼女には、魔術や治療などでなんども助けられた
「彼女には、今までありがとうとこれからは、好きに生きてくれと伝えてもらえますか」

「わかった伝えてておこう」そう言って彼は、宝石剣を構えた

「それでは、いくぞ」

「お願いします」

そうして彼は光に包まれ消えていった

「結局最後までお人好しだったわね」

「なにそれが士郎の良いところだ」

その言葉に蒼崎青子は、

ポカンと口をあけた

「なんだ？」

「姉貴が士郎をほめるなんて珍しいわね」

「ほっとけ」

始まる前のひとつの終わり（後書き）

次回から本編です。

桜の下での出会い（前書き）

完結が第一目標の作品

両方とも好きなのであまり駄作にならないよう頑張ります

桜の下での出会い

side 衛宮

「ん・・・ここは、どこだ」そこは桜が満開に咲きほこる公園だった

「これは、すごいな」

つい自分の今の状態を忘れてしまいうくらいにきれいだった

もう会えないであろう家族達に見せたかったなと考えていると

ふいに自分が呼ばれているような気がして少しずつ

その方向に向かって歩き始めた

side 由夢

「もうそろそろクリスマスパーティーの時期だね」 と姉である音姫が言った

「そうだね」どうせまた今年も兄さんや杉並先輩達が悪さするんだろってね」と 呆れたふうに由夢が言った「あははで、でも今年

は弟君は、やらないって言ってたよ」

「どうだか」そんな感じで話をしていると

「あれは、さくらさん？」

さくらさんは、誰かと話をしているようだった

side 衛宮

「これはまたすごいな」

そこにあっただのは、ここに来て見たなかでも一番大きい桜の木だった

「多分ここらへんから声が聞こえた気がするんだよな」すると桜の木の後ろから金髪の少女がいた

「君が俺をよんでいたのか」「うん、そうだよ どうしても聞きたいことがあつてね」

「なんだい？」

「あなたは、どうやってここに来たの」

それは、予想どおりの質問だった（しかしどうやって話せばいいの
だろうか下手に話せばこちらが不利になる）

そう士郎が悩んでいると

少女が

「安心してぼくは、君に危害を加えるつもりは、ないよそれとね」
といったん言葉を区切って

少し照れながらしかしどこか誇らしげにこう言った

「ボクはね魔法使いなんだ」

こうして桜の咲きほこる島での甘くて切ない物語が
はじまった

桜の下での出会い（後書き）

まあまあいいスタートでしょうか？多分どこか誤字脱字があるんだ
ろっなでも私の作品なので頑張ります

新たな始まりの予感（前書き）

話の流れてきに魔法使いっていったことを許してください

新たな始まりの予感

深々と桜が舞っていた

驚くほどゆつたりと音もなく見渡す限りに舞い散る

桜の花びら

理想を追って傷だらけになって途方にくれていた自分さえ見惚れてしまつくらい綺麗な景色だった

だからここは天国なんだと思った。

ふいに手を差し伸べられた俺はそれをどうすればいいかわからずただただその手を見続けた

そんな始まりをつげる夢は唐突にやってきた

「ボクはね魔法使いなんだ」そんな言葉を俺は簡単に受け入れることができただから俺もこう答えた

「俺もね魔法使いなんだ」

「そうなんだじゃあ一緒だね」

「ああ」

「ところで君名前なんて言うの？」

「俺の名前は衛宮士郎よろしくえ」と？

「芳乃さくら さくらさんって読んでね」

「了解したさくらさん」

「それで士郎くんは、どこかいくあてはあるの？」
「いや、この世界に来たばかりでここがどこなのかすら知らないんだ」

「そうなんだ、じゃあ家においでよ」

「良いんですか？こんな怪しいやつ家に入れて？」

「うにゃ？士郎君は怪しくなんかないよそれに本当に怪しい人だったらそんなこと言わないし」

「ありがとうございます」

「なんのなんの それじゃ行こっか」

「はい」

side 由夢

「なんか話が終わったみたいだね」

「うんそうだねお仕事の話かな？」

「怪しいそれにあの人怪我してるみたいだったよ」

「そうだね あっ！歩きだしたよ」

「どこ行くんだろ？」

「後でさくらさんに聞けばいいよ」

「そうだね」

side 士郎

「着いたよ」

「へえ、いい家に住んでますね」

「にゃはは、ありがとうございますでも士郎君も今日からここに住むんだよ」

「そうですねでは、今日は俺が料理作りますよ」

「ありがとうでもその前に服着替えたほうがいいんじゃない？」

「え？あ」

言われるまで忘れていたがさっきまで代行者と戦っていて怪我してるんだっ

でも鞘があるからもうほとんど傷はなかったのだが
服のほうは、血だらけだった

「えっとシャワーかります」「うんいいよ」

そして俺は、体を洗い

投影した服に着替えた

「それじゃさくらさん少し俺のことについて話します」「うん」

そうして俺は封印指定や怪我した理由などは、ぼかしながら俺の魔術のこと平行世界から来たことを話したさくらさんも話を聞いて驚いていた

「じゃあ士郎君が今来てる服は、魔法で作ったの?」「はい他にもいろいろなものがつくれますよ」

「そうじゃあ次は、ボクが話す番だね」

そうしてさくらさんの魔法の話を聞いてこの世界についても聞いた今度は、こちらが驚いたこの世界では、戦争や紛争と言ったものは最近では、ほとんど無いらしいなんでも今は、俺がいた時代より五十年ちかくたっているみたいで今は、環境問題や資源の問題を世界全体で考えているという

「貴重な話をどうもありがとうございます」

「いやいや士郎君の話も貴重な話だったよ」

「そう言ってもらえると助かります。それじゃあそろそろ夕飯の準備をします」

「うん、じゃあ五人分お願いね」

「?はいわかりました」

お客さんでもくるのかな?

「ただいま」

「あ！おかえり義之君」

「ただいまさくらさん」

「あ、さくらさんただいま」「ただいま」

「おかえり音姫ちゃんに由夢ちゃん」

「ん？知らない靴があるけどお客さん？」

「あ、ちがうよ今日からここに住む人なんだ」

「「え？」」

「さくらさんご飯の支度できましたよ？」

「「えーーーーー！？」「」」

side 士郎

「えつと？衛宮士郎です。よろしく」

「桜内義之です。よろしく」「朝倉音姫です。」

「朝倉由夢です」

最後の子は、なんだか警戒されてるな

「士郎君は、ボクの親戚の子でいろいろな事情でこの初音島に引っ越してきたんだ」

「へえ、そうなんですか」

「以前は、どこにいたんですか？」

「ロンドンだ」

「日本語上手だけど何回か初音島に来たことが？」

「いや、ない今日が初めてだそれと日本語が上手なのは、俺が日本人だからだ」その後いろいろ質問されて一応は認められたらしい

「じゃあそろそろご飯にしよう今日は、カレーを作ってみたから」

「そうだねじゃあいたただこうか」

「「「「いただきます！」「」「」」」」パク……………」

「う……うまいぞ」

「お、美味しい」

「ま、負けた」

「兄さんのより美味しいかも」

「フム、あり合わせで作ったから少し失敗したか」

「これで失敗!?」

「うゝゝ弟君ゝわたし自信なくしたよゝ」

「音姉俺もだ」

「ね、ねえ士郎君」

「なんですか?音姫さん」

「士郎君は、カレーをつくるのが得意なのかな」

まるで最後の希望と言わんばかりに質問したが…

「いや、俺はどっちかというところ和食のほう得意だ」

ドカーン

見事に撃沈した

「うわゝん!!」

「お、お姉ちゃん!?」

「音姉!」

それから2人がかりで30分かけて説得してようやく音姫さん押し入れから出てきたという

「にぎやかですね」

「うにゃ今日は、いつもよりにぎやかだよ」

「あつそうそう士郎君」「なんです?」

「士郎君には、明後日から風見学園に通ってもらつよ」

「え!?いやそこまでしてもらうわけには」

「いいのいいの子供は、黙って大人に甘えなさい」

「・・・義之」

「なんだ?」

「さくらさんって一体何歳なんだ?」

「実は俺も知らないんだ」

「そうなのか？」

「ああそれで風見学園の学園長なんだ」

「・・・すまない耳がブツ壊れたようだもう一度言ってくれ誰が学園長だっけ？」

「だからさくらさん」

「・・・俺が知らないうちに法律が変わったようだな」

「いや、変わってませんから」由夢のツッコミが入る

「こうしてなんとも騒がしい1日が終わった」

新たな始まりの予感（後書き）

「さくら」

うにゃゝとうとう義之君達と士郎君の出会いだね独自設定とか入ってるのは、

許してくれると幸いです。

さて次回からは、士郎君が学校に通っちゃうよボクも学園長ならしいとこみせなきゃ

とりあえずは、作者の都合によりマンガのほうを主体にしていきたいと思いますそれでは、また次回ゝ

新たな出会い（前書き）

薄い内容＋シロウ薄いかな？

新たな出会い

side 義之

人間は夢を見る生き物である。

人とは違う。

特別でありたい。

他人からちやほやされたい。

まるで漫画やゲームのヒーローのように。

特殊な力を持っていて大活躍

もちろん、心の底では信じていない。

この世界に不思議なものなんて無いって知っているから。

でも、夜眠る前。

まぶたを閉じて、そして想像してしまう。

空を自由に飛び回る姿を

人に見えない速度で動き回り、手のひらからはレーザーを発射する。

憧れている異性のピンチに駆けつけて救出する。

最後はもちろんハッピーエンドだ。

そんな夢。

まあ、夢の中だからどんな理不尽な展開だって許容しよう。

世界の半分を破壊した拳句、翌日には元通り。

まあ、夢だしね。

ヒロインが某国民的アイドルグループ。

しかも、全員ひとまとめのハーレム状態ってのも認めよう。

誰にも迷惑かかるわけじゃないから。

「……………」

「はあ」

正直、迷惑だったけど。

俺の力。

——他人の夢を見せられる そんな不思議な体質をもつ俺だけど、特別だなんて喜んでいられない。

いや、こんな、特別欲しくないし。

欲しいって人がいるのであれば、喜んで譲ってあげたいと思う。

夢なんでもともと支離滅裂な上に、他人様の夢だからな。

ますますもって理解不能だ。

しかし今回の夢はいつもと違って幸せなんかと程遠いまさに地獄だった。

「……………で、いつまで続くんだよこれ!!」

それは、一面の炎と充満した死の匂い。

誰一人生存者のいない惨劇

絶望の中で助けを請い続ける人々

それを必死に振り払いながら自分では、助けられないと、ごめんなさいと謝り続けながら助けを求め歩き続ける夢の主。

でも心の中では、理解していたはずだ。

死ぬのが同然だと。

そして一人の男が現れた。

その男は、夢の主を抱き上げて目に涙をためて微笑んでいた。

その顔はあまりにも幸せそうな顔だった。

「ま、夢だからね……」

口元を手でおさえながら、その光景を見ていると

これで夢放送が終わります。

そんなアナウンスが流れた。

「ふあゝあ」

大きく欠伸をする。

他人の夢を見せられる能力の代償。

翌日の睡眠不足。

「割りに合わないよな、これ」

そう思いながらも地獄の終わりを喜んでいた

side 士郎

程よい肌寒さに目を覚まし軽く伸びをする。

「んゝゝゝはあゝさて朝の鍛練でもしますか！」

そうして布団をたたんで、この世界に来て初の鍛練を始めた

鍛練を終え朝食の支度をしようと思い台所にむかうと居間にさくらさんがいた。

「おはようございます。さくらさん」

「うにゃ、おはよう士郎君！」さくらさんが満面の笑顔でそう言うってくる

「これから朝食の準備しますけどリクエストか何かありますか？」

「うゝんとそれじゃあ士郎君の得意な和食で！」

「わかりました。それじゃあ少し待っててください」

「うん！それじゃあ期待してるよ」

こんなに笑顔で言われたらしょうがない、全力で期待こたえろとしよう！

そうして台所に立つ

（さて、それじゃあはじめますか！）

まずは、冷蔵庫の中の食材を解析する。

（まあ、解析の魔術をこんなことに使うのは俺くらいか）

以前遠坂と買い物にいきそこで食材を選んでいるとき遠坂に解析の魔術を使っていることがバレてそりゃあもうとてつもなく怒られたものだ。

そうこう考えているうちに一品目の料理が出来上がる

「よし！次は、味噌汁だな」「おはようございます」

「あ、さくらさんおはようございます！」

「音姫ちゃん、由夢ちゃんおはよう！」

ん？音姫と由夢か

「おはよう音姫、由夢」

「おはよう士郎君！」

「おはようございます士郎さん。」

「士郎君制服似合ってるよ」

「ありがとうございます。音姫さんと由夢もとても似合ってますよ。」

「えへへ〜ありがとう士郎君」

その時由夢は、思ったこの人は、兄と同じ属性なんだろうなと
「それじゃあ朝食の支度に戻りますんで」

「あつ！私も手伝うよ。」

side 由夢

「あつ！私も手伝うよ。」

お姉ちゃんたらもうシロウさんのことを信用しきって
まあ、確かに悪い人ではなさそうだけど…なんだかあやしい。

そもそも！家にくる前になんで怪我してたんだろう？
服についてた血の量からしてかなりの怪我のはず。

だけど怪我していた様子はないし……

とにかくお姉ちゃんはあるんだし、私がしっかりしなきゃ！

side シロウ

「「「「いただきます！」「」「」」」

「あ！この味噌汁おいしい！！」

「こっちの卵焼きもおいしいよ」

「ありがとねシロウ君結構勉強になったよ」

「いえいえこちらこそ勉強になりました。」

「あつ！ずるいぞ音姉シロウから料理教わったのか？」

「え…あはは」

「笑ってごまかしてもダメ、なあシロウ今度俺にも料理教えてもらってもいいか？」

「ああいいぞ俺も義之の料理には興味があるからな」

「あの…私も…」

「え！？やめとけ由夢お前の料理は——」

「なんですか兄さん？」

あゝこの笑顔は、あの赤いあくまをおもいだすな

こういうときはかかわらないのが一番だ うんだから義之その助けを求め視線はやめてくれ俺にはあくまに対抗する術も心もないんだ

「弟君忘れものはない？」

「大丈夫それじゃあさくらさんそろそろ行ってきますんで」

「うんそれじゃあ後でシロウ君は職員室に来てね」

「はい。わかりましたそれじゃあ行ってきます」

「うん、いつてらっしゃい」

side 義之

「なあなあ義之ちゃん」

「なんだよ涉？嬉しそうだな」

「あたりまえだろ！？転校生がくるんだぞ！！転校生と言ったらかわいいい女の子！」

ずいぶんと壊れてるな

「フム、俺の情報では一年の女子としかわかっていなかったが今朝急にもう1人転校生がくると聞いたときには驚いたぞもしかどこかの国の王族？いやそれ以外にも可能性が……」
なんかブツブツ言っつて杉並も勝手に自分の世界に入ってるし

「で！？どんな子なんだよ義之？その子義之の家にいるんだろ？」

「え！？そうなの？義之君？」

「これは、新しいライバルの出現ね小恋」

「ふえ！？別にそんなんじゃないよ！」

こいつらは、雪村杏に花咲茜に月島小恋 三人あわせて雪月花とよばれている

ちつ、また義之かよとかこのフラグ男とかクラスの男どもに言われたいほうだいな 涉には悪いが真実を教えてやるか

「みんな何か誤解してるかもしれないが転校生は男だぞ」

ピシッ！

あっ 涉が固まった

「「「なにーーーーー！？」「」」

side 士郎

「え」とそれでは、転校生の紹介をします。シロウ君入ってきて」

さくらさんに呼ばれたので教室入る

「くっそ〜本当に男だ〜杉並〜」

「よしよし友よ」

なんだあの二人は？俺が男だとなにかまずいのか？

「それじゃあシロウ君あいさつお願い」

「はい　えーと今日からこのクラスの一員になる衛宮士郎です。
趣味は料理にがらくたいじりです。みなさんよろしい」

「はいありがとうございます。それじゃあシロウ君の席は…杉並
君の後ろだねみんな仲良くしてね」

そうして桜さんは教室から出ていった。

- - - - -

「おい、次、全校集会だぞ。体育館」

「あー、俺パスパス」

「アホなことやってないで行くぞほら転校生ちゃんも」

「転校生ちゃん言っな板橋」

「板橋言っな、涉と呼べ」

「じゃあ俺も転校生ちゃんじゃなくてシロウな」

「そんなことよりもさっさと行くぞ」

「わあつたよ」

しぶしぶだかやつと重い腰を上げる義之

「いいかシロウこの学校で不用意に音姉に近づくかないほうが身のためだぞ」

「なんでだ？」

「多分あとでわかる」

「？」

ざわざわと体育館は喧騒に包まれていた

見渡す限り人、人、人

どうやら本校というのと付属のほうもあわせて全ての生徒が集められているらしい

「で？一体なんのための全校集会なんだ？」

すると杉並が得意気に答えてくる

「ふ、決まっております。われわれの修学旅行に向けての連絡事項だ」

「へ？こんな時期に？」

「まあいろいろあったのだ」ニヤリと杉並がいい笑顔で笑う
聞きたくないな

「それとクリパだなもう来月だしな」

「なるほど」

「で今年は何するんだ杉並？」

「今のところは企業秘密だ。ただ過去最大規模の祭りになる……と
だけは言っておこう」

「杉並がなにかするの？」

「こいつは、毎回毎回お祭りになると悪さ……といかバカなことす
るんだ」

「何するのも勝手だけど、俺を巻き込まないでくれよ？」

「俺も勘弁してくれ」

「安心しろ今年はシロウがいる」

「俺もやらない」

なぜだーと杉並が叫んだところで、

『ただいまより全校集会を開会します』

ちよつど開始を知らせるアナウンスが流れた。

『まずはじめに先生方から幾つか連絡事項があります』

透き通った力強い声だな

活発そうな顔立ちに似合った短くさっぱりとした髪

健康的な笑顔

「高坂まゆき先輩だ音姉と同じ本校の二年で生徒会の副会長を務めてる」

「行動的で親しみやすい性格に生徒の間ではなかなかの人気を誇っている杉並の天敵だ。ちなみに俺も少し苦手だったりするんだけど」

俺の中の何かがつげる

あれは、赤い悪魔と同類だと

『はい。では次に修学旅行とクリスマスパーティーについての連絡事項があります。生徒会長の朝倉音姫さん、お願いします』

その声と共に館内中の視線が壇上に注がれた。

ゆっくりとした動作で壇上へ上がる

長い髪がひらりと揺れて、

『それでは、私の方から連絡いたします』

柔らかな声が響き渡った

『例年通り12月23日から25日にかけての三日間、我が風見学

園ではクリスマスパーティーを開催します』

『一般のかたへの公開を行うのが23日から24日の二日間。25日は学園関係者のみの後夜祭となります』

淀みのない流れるような声（なあなあシロウやっぱり音姫先輩っていいだろ？もうたまんねーよ！ルックス良し！成績良し！性格良し！優しくてしっかりものでそのうえ料理もうまい）

『修学旅行のほうは付属は京都に決定しました。なお――』

（しかもすげーいい匂いするんだよね、俺、音姫先輩の匂いでメシ三杯いけるねマジで）
それってただの変態なのでは？

（うるせーぞ、渉）

（んだよ別にいいじゃんかよ俺はお前やシロウと違って遠くから眺めることしかできねーんだからよ）

『――とは言っても授業の一環として行われる行事なので各人も節度を持った行動を心がけるように注意して下さい』

（あー俺も音姫先輩みたいなお姉ちゃんが欲しいよ。義之、シロウやっぱてめーら羨ましすぎんぞ！）

（姉って言っても俺も義之も別に本当の姉って訳じゃないし）

（ますますいいじゃんかよ！ちくしょう！俺も美人姉妹がいる家に居候してーなあ）

後ろで地団駄を踏む渉

居候してるのはあくまでさくらの家なんだか……

『それでは、皆さん楽しいクリスマスパーティーと修学旅行にしましょうね』

見るもの全ての心を奪うかのような温かい笑顔

館内の至るところからため息がこぼれた。
なぜだ？

（ああうう！やっぱたまねーよ音姫先輩）

（ああくそ！）

ガシッ！

（痛っ！何すんだよ渉）

（うつせー！てめーらはこんくらい甘んじて受ける義務があんだよ）

俺もなのか？

こらまわりの男どももうつんと頷くな！

（家に帰っても音姫先輩にあえるなんて羨ましすぎんぞ、てめーら）

（そうだそうだ！）

渉の発言に頷くな男共は皆目が血走っていた

（義之が言いたかったことがなんとなくわかった気がする）

ガスッ！

あつまた義之が殴られてる

「やっぱり憧れるな音姫先輩」

「だよな最高のお姉ちゃんって感じ？」

それに小恋も賛同する

「うん。頼りがいがあるし、優しいし、きれいだし」

「あー羨ましいなこの野郎は」

「まだ言うか」

「って噂をすればだね」

花咲 茜が指差した先。

たくさんの生徒に囲まれている音姫さんの姿があつた
ひっきりなしに声をかけられては迅速に答えていく。

にも関わらず囲む人の数が減る様子はなかった

「大変そうだな相変わらず」

「いつもあんな感じなのか？」

「クリパまであまり時間がないからな」

「すごいよなー完璧？理想？最強？」

遠坂がいたら対抗意識燃やすだろうな、勝負なんかしたら多分遠坂が負けるだろうな

なぜかって？

なぜなら遠坂にはランクEXうつかりがあるからな
多分ここ一番つてときに発動して負けるだろうな

そんなことを考えていると音姫さんが満面の笑みでこちらに来た
なぜか義之は慌ててるし

そうこうしてる間にも人ごみをかきわけこちらにかけよってくる。

「えへへ」

軽く息を切らせて義之の前に立つ
とろけそうなくらい笑顔だった。

しかしまわりの男どもは殺気だっていた

「あーほらちゃんとホックする」

やめとけ音姫さんそれ以上やると義之の命かわるぞ
しかしそれを知ってか知らずか義之にぐいっと近づいた

「しょうがないな、弟くんは、はいこれでよし！」

「ん、あとは」

「だ、大丈夫だから！それよか朝倉先輩のほうは大丈夫なの？仕事の途中でしょ？」

義之も必死に抵抗するが

「大丈夫大丈夫」

それの意味をなさず即答だった

まわりからは、はっきりと噂話が聞こえてくるし正直生きた心地がしないだろうな

「あ、弟くんこの後なんだけど時間ある？」

回りが一斉に耳を澄ましたのがわかった。

男どもはわかってんよな！て義之に視線で訴えてるし実際に声に出して言ってるやつもいる

「ご、ごめんちょっと忙しいから」

「そつかしょうがないね……残念」

しゅんとする音姫さん

するとまた男どもから何か言われてるみたいなで助けてくださいって顔でこっちを向いてるし

はあ、しょうがない

そうして蔵に閉まっておいた（わからない人は四次元ポケットみた

いなのが空間にあるみたいな感じで想像してね）から朝作った弁当箱を取り出す

「はい、音姫先輩お弁当です。」

するとしゅんとしたのがうそのように笑顔になった

「わゝありがとうシロウくん」

「そうだシロウくん今日の晩ごはん何しようか？」

「そうですね冷蔵庫の中の食材を使えばいろいろ作れますけど音姫さんのリクエストは？」

「うゝんそうだねカレーライスとかどうかな？シロウくんにも教わりたいし」

「わかりました。じゃあ食材買っておきますんで」

「あつ！でもシロウくん越してばかりでここらへんあんまり詳しくないでしょう？」

「そうですね」

「だったら後で一緒に買い物行っている案内してあげる」

「えつといいんですか？」

「うん！弟くん2号のためだもん」

「それじゃあお願いします」

「ほれー音姫仕事するよ」

「あ、まゆき」

「愛しの弟くんの世話を焼くのもいいけど仕事も片付けなないと」

「うん！もちろんだよ。さあはやく仕事しなくちゃ」

「？ってわけで音姫借りていくよ弟くんって君みない顔だね？」

「えへへ弟くん2号の衛宮士朗くんだよ」

「へえーそれじゃあ借りてくね」

「はい、どうぞどうぞ」義之が手をひらひらとふる

「あつ！シロウくん今日も晩ごはん楽しみにしてるからね」

「……………」

空気が凍りついた。

しかし俺はこんなことには、なれている。

走り出す準備は万全

ガシツと肩に手を置かれる瞬間！

はじめからトップスピードで走り出す！！

「あ！逃げたぞー！追えー奴を捕まえて洗いざらいはかせろー」

「いくぞ野郎共！！」

おお！！と男どもが走り出す

こうして全校内鬼ごっこが幕をあけた。

ちなみに逃げ遅れた義之は渉たちに捕まったらしい

御愁傷様

「なあシロウ？」

「うん？なんだ？」

昼休み弁当箱を義之に渡そうと思っていたら義之に声をかけられた

「これから雪月花と渉と杉並と昼飯食べるんだけどいつしよに来ないか」

「いいのか？せっかくグループで食べるのに俺なんか誘って」

「ああ、みんなもシロウと話がしたいみたいだな」

「そうかならお邪魔させてもらっそれとほら弁当」

「ああ、ありがとうそれじゃあ中庭にいるから行こうぜ」

「ああ」

俺たちが中庭につくとすでに来ていた杏たちがレジャーシートを広げていた

「義之、おそーい」

「悪い悪い待たせたな」

「シロウもしっかりつれてきたみたいね」

「シロウ、お前らがなかなかこないから……俺はもう空腹で空腹で……死んじゃうかと思ったじゃねーかぁ！」

「ああ、悪かった」

「さ、桜内たちも来たことだし早速試食と行こうではないか」

「そうね、茜も早く用意して」

「うん」

「試食？」

「うん、皆得意料理を作ってきたから食べてみて感想を聞かせてほしいの」

「俺はなんでも食うぜ」

「それじゃあ意味がないのよ。忌憚のない意見を聞かせて頂戴」

「なんでまたそんなことを？」

「小恋の提案だよ。ね？」

「うん。たまにはみんなで競いあうのもいいかなって思ってた」

「なるほどつまり俺たちは実験台であり審査員でもあるわけだ」

「あ、わかる？」

「そうとも言っわね」

杏と茜は顔を見合せてクスリと笑った

「ふたりとも、そこまで意味深に微笑まないでよちゃんと作って来たんでしょ？」

「「当然」」

「で義之が持つてるの何？」

「ああ、これはシロウが作って来た弁当なんだ」

「シロウが？料理できるの？」

「料理できたの？」

「大丈夫なの？」

「野郎が作った料理なんて食わん！」

「フム、ここは安全な方の弁当を選ぶべきだな」

「失礼だな俺だって料理ぐらいできるさ」

師匠たちに超一流の味じゃなければ攻撃されなからな

「えゝでもね」

「わかったみんなその言葉忘れるなよ特に渉！食べないと言ったことを後悔させてやるさ」

「よし！まずは、私たちの料理を食べて次にシロウくんの弁当ね！審査員は義之くんと杉並くんよろしく」

「ふふ、レベルの違いを教えてあげるわ」

「シロウやつらは、油断している男だって料理ができることくらい教えてやれ！」

「フム、では期待に答えるでしょう」

side 義之

「さっ、召し上がれ」

茜の弁当はミックスサンド

大きめのバスケットにカラフルなサンドイッチがところ狭しと詰め込まれていた

杏のは三段の重箱中身は、おせち料理だった

小恋のはウィンナーや唐揚げ、ミートボールなど定番のおかずがぎっしりとつまっていた

「ほっ……」

「これは、なかなか……」
「美味い！」

三人の料理はどれも上手かったしかし朝の御飯のときよりは、少し劣っている

次はシロウの料理だ

弁当の中身は、いたって普通だった 定番の玉子焼きやミートボール他にはハムサンドなど俺がもらった弁当とシロウの弁当は中身がそれぞれ違ったが中身は普通に見える茜たちも勝利を確信しているだろうが

しかし！

料理人には、わかるこの料理の輝きとオーラが！
ひとつひとつの食材を最大限に生かしたおかずの数々

そうしてシロウの料理を食べれない哀れな渉に同情する

side シロウ

「「いただきます」

「……………」

「……………」

「へっ！この反応は月島たちの勝ちだな！あゝよかった俺が食べなくてこの勝負月」

「ちよつと待って！」

杏が渉を止める

「へ？」

見ると義之と杉並が震えていた。

「泣いてる？」

「う、う、」

「「「う？」」「「「

「「うまい！」「「

「なんだこのハムサンドめちゃうまいではないか！」

「冷めていてもここまでおいしいなんて！」

「杉並！」

「うむ！」

「この勝負シロウ勝ちだ！！」

「え！うそどれどれ」

「私も食べないと納得できないよ」

「やめておけ月島嬢レベルの差にショックをうけるぞ」

「いいからよこしなさい」

そして三人はそれぞれ俺の弁当を食べた

「ねえシロウ（くん）」

「」「参りました」「」

「何ーーーーー！？」

「ねえこれどこのハムなの？」

「それは俺が作ったハムだ」

「今度このミートボールのレシピ教えて」

「ああ、いいぞ」

「……………シロウ？」

「ん？」

「まだなにか隠してるわね？」

「む？バレタカ はいデザートとお茶だ」

「わーお」

「これもおいしい」

「シロウ？」

「雪村？」

「杏でいいわ」

「ああでどうした杏？」

「今度家に来て料理教えてもらっていいかしら？」

「いいぞ」

「ああ杏だけずるい」

「私たちにも教えて」

「あ、ああいいぞ」

「やった」

「な、なあ義之ちゃん？」

「ん？どうした涉？」

「そんなにうまいんか？」

「ああ」

「俺にもよこせ」

「ハグハグ…」

「あー杉並てめゝ俺の分！！」

「野郎のめしは食わないのであろう？」

「ぐぬぬゝうえーんシロウちゃん後悔しました。弁当くわせて」

「ほら、涉の分」

「シロウお前…こんな冷たい俺にも温く接してくれるのね　ああ
ゝこれが本当の人の温かさなんだな」

「泣きながら食べるとは大袈裟だな」

「うめえー」

こうして第一回料理対決は幕を閉じいつの間にかみんなと打ち解け料理のはなしでもりあがった

冬空の帰り道

side 士郎

「ふゝ、結構遅くなったなあ」

昇降口で靴を取り替える。

「まったくだ、クリスマスパーティーの出し物がまだ決まってない、
というのにも驚きだが、義之含む三人集の巧みな話題転換能力には
恐れいった。」

「うつ、それは嫌味か？」

「まさか、結局また次のホームルームにもちこしになって大変な思
いをする委員長への同情だよ。」

「言い訳のしようもございません。」

「む……」

昇降口を出た途端、温度が一気に下がった。

冷たい風が吹き付けて、義之は身を縮み込ませる。

視界には一面のピンク

満開の桜

学園を取り囲むように咲き乱れる桜の花びらは、風に舞っては散っている。

うん、違和感ありすぎるな、これは明らかに春の風景だ

「景色と気温の整合性が取れてないな。」

「ああ、士郎もそう思うか……なんの意味もないがつい文句を言いたくなるよな」

なんでもこの初音島の桜は文字通り年中無休に咲き続けるそうだ

「ん？」

ふと、校門のところに目を向けるとポツンと一人で壁に寄りかかっている子がいた。

「あれは…由夢か？」

「ん？ああそうだな何してんだこんなくそ寒いなか？」

俺と義之は早足で由夢に近づいた。

「こんなところで寒くないか由夢？」

「え？」

由夢は驚いた様な声を上げて、くるりと俺たちのほうにその顔を向けた。

「あ、士郎さんついでに兄さん奇遇だね？」

「全然奇遇でもないし俺はついでなのか？」

由夢はポンツと体重の反動を利用して飛ぶように体を起こした。

「ま、それはいいとして、今から帰り？」

「ああ、由夢は誰かと待ち合わせか？」

「や、たまには兄さんと一緒に帰ろうかなと思ってさ」

「そか、うん、それじゃ、また明日！」

義之は爽やかな笑顔を浮かべ、ダッシュで家の方向に走っていった。

「どうしたんだ？義之？」そう言って由夢のほうを振り替えると

「……………フフフ」

笑顔だった。

笑顔が怖かった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

こちらに目を向けながら由夢は終始無言。

さすがに俺も沈黙に耐えかね。

「…どうした？」

「暇だし寒いしお腹空いたし雪降りそうだし、知らない男の子に声をかけられて、それでやっと兄さんが来たかと思えば逃げられるしもう最悪！」

「はぁ……」

「こんな寒い中わざわざこんな可愛い妹が兄さんを待ってたって言うのにさ……………おっと地が」と言い辺りを見回す。

「ふう〜お腹空いた。」

「……………おごろうか？」

「え？」

「いや、だから奢ろうか？」

「い、いいですよ大丈夫で『きゅ』」

断ろうとしたのだろうが体というものは正直で、なんともかわいらしいお腹の音になった。

「（／／／）」

実に気まずい雰囲気である。

「……………そうだ今日の晩御飯の買い物に付き合ってくれないか？」

「え？」

「ほら、俺ここに来たばかりたがらさ、どこにスーパーがあるとかわからないから一緒に来てくれると助かるというかさ、それでそのお礼として何かおごってあげるよ。」

そう言う

じ——と由夢はこちらを見た後。

「クス、しょうがないな。それじゃあ今日だけ特別に付き合ってください。」

「ありがとう。よし、それじゃあ寒いし行くか？」

「はい！じゃあ、まずは桜公園のクレープ屋さんへ行きましょう！」

くるつと踵を返すと、俺の返事も待たずに、たっ たっ たっ たっ と俺の前を由夢が走っていく。

そしてすこし先で由夢が振り返り

「ほら、士郎さん、早く行こ！」

「ああ、すぐいく！」

冬の日暮れは早いもので、空はだいぶ薄暗くなってきた。

俺はとてとと薄暗い桜並木を買い物袋を両手に持ちながら、歩く隣にいる由夢は両手にクレープを握り満足そうにそれを食べている。

「はいっ」

甘い香りが鼻につく。

「士郎さんにも一口あげるよ」

顔の前に食べかけのクレープが差し出される

「いや、いいよそれは由夢のだ。」

「遠慮しない」

「……間接キスになるぞ?」

「え! うん…(ノノノ) きよ、兄妹みたいなものになるんだから、変に意識しない」

「兄妹?」

「むゝゝえいつ!」

「んぐつ」

由夢は中々食べない俺に無理やりにクレープを口の中に押し込んで来た。

うん、ラズベリーソースの甘酸っぱさがアクセントとなって後味をすっきりとさせる。

「ね?おいしいでしょ?」

満足そうな顔で由夢が覗きこんできた。

「ああ、確かに上手いがね、少し強引すぎると思わんかね?」

「へ?」

あっと、ついアーチャーの口調が出てしまった。

「いや、そのうまかった。ありがとう。」

「えゝと、はい。」

ところどころに子どもたちの遊び声が聞こえる。

子どもは風の子とはよく言っただものだ。

「本当士郎さんって不思議な人だね？」

「そうか？」

「うん、なんだかよくわからないけどすごく不思議。あれ？」

「どうした？」

「えっと、うん確か……この景色……」

突然立ち止まり、キョロキョロ辺りを見回す。

「んーちよつと待って。」

由夢はがさがさと鞆を漁るとメモ帳を取り出した。

「えっと……」

ペラペラとページをめくっていく。

「嘘……いや、でも夢では確かに兄さんだったし……」

なんだかゴニョゴニョと言っていて何を言ってるか聞き取れない。

「そんはず、あっ！士郎さんあぶな——」

——ガシッ！

「おっと」

いきなり飛んできたボールをキャッチする。

「え？」

「すいませーん」

「ああ、これ君たちのか？」

「はい！」

「元気な子だな。」

「危ないから気をつけるよ？」

「うん、お兄ちゃんごめんなさい」

「うん、それじゃあもうそろそろ暗くなるから早く帰るんだぞ？」

「うん！バイバイ」

と子どもが大きく手をふる

「ああ」

それに俺も手をふりかえす

「……………」

「それじゃあ、帰ろうか、って由夢？」

「え？あつ、うん」

そう言うと由夢はいそいそとメモ帳を鞆にしまう。

「そういえばなんだったんだ？」

「なにが？」

「さっきのメモ帳。」

「や、内緒です。」

「そか」

それからまた話をしながら家への道を歩くのだった。

余談だが帰ってコタツで寝転ぶ義之を由夢が制裁を加えたのは予想通りだった。

グツグツと音を立てカレーの良い匂いが部屋を包む。
「どうだ？」

「うん、すごく美味しい」

音姫が笑顔で味の評価をしてくれる。

「はい、次は弟君」

「ん、サンキュ音姉。うわ、うますぎる」

「そくだよね、本当、文句のつけようがないよね」

「ありがとう。よし、完成だ！」

コンロの火を止めてお皿に盛り付ける

いわずもがな今日の晩御飯は俺のカレーだ。

いつもは当番とか決めているわけではないらしいが、俺が来て台所人口が増えたので当番せいになることとなった。

この風景を見るとなつかしい日常風景を思い出す。

衛宮邸でのなつかしい日常を

もう手にすることのないと思っていた、温かな日常を今俺は噛みし

めている。

「おい由夢くスプーンの用意しろ」

「えっかつたるい」

「由夢ちゃん！」

「や、冗談ですってば」

ジャージにメガネとリラックスモードの由夢が台所に来た。

やはり何を着ても似合う。

「や、それにしてもおふたりさん、お似合いだね。まさに新婚さんって感じですか？」

「し、新婚さん！？何を言ってるの由夢ちゃん。やだな」

義之の隣でもじもじとエプロンを弄りだす音姫。

「妹としましては、仲の良いおふたりの至福の時間を邪魔してしまうのは、いかなものかと、ちょっと考えてしまっわけです」

「なんでさ、俺もいるぞ由夢？」

「はいはい、いいからスプーンを用意しろ。」

「はい兄さんも士郎さんもノリが悪いな」

「そんな新婚さんだなんて……」

「音姫？音姫！おい、ダメだどこか遠い世界に旅立っている。」

その後、皆カレーのおいしさにご満悦の表情をしていた。

久しぶりにそんな顔を見ることができた。

うん、頑張ったかいがあった。

「よし、後片付け終了つと。」

皿洗い、台所の整理、冷蔵庫の中身の点検滞りなく終了。

いや、それにしても今日のスーパー凄かったな！

まさか、時代が違うだけであんなにもスパイスや香辛料が増えてい
るとは、思わなかった。

今はまだ見てないけど電化製品とかもかなり変わっているんだろうな

さっきなんて、テレビのリモコンと携帯のあまりの小ささに驚愕してしまった。

トントントントン

「ふにゃ」

このだらだらとしてやる気の無さを微塵も隠すことのない声を発しているのは、

ご存知芳乃さくらさん現在の俺の保護者（には見えないよな普通）兼風見学園の学園長だ。

なんでも博士号をいくつもとっている天才なんだとか……

いつも明るく元気なちびっこ（ちびっこって言ったのは内緒だぞ？）というイメージもあるが冷静で大人な一面も持つ。

学園でもその持ち前の明るさと可愛さから人気を呼び芳乃学園長を愛でる会などもあるそうだ。

「どうしたんですか？」

「あ、士郎くん、あのね、義之くんと一緒に全26完のDVDを見ようって言ったなら断られちゃた」

「いや、明日も学校ありますから当然では？」

「ちゃんと休んでもいいよって言ったよ？」

「あなた本当に学園長ですか!？」

学園長が生徒にサボリをすすめるなんて聞いたことがない。

「えゝ、いいじゃん別に」

「駄目です。さあ、さくらさんも仕事で疲れてるでしょうから今日は寝ましよう?」

「えゝ、嫌だい!今日見るんだゝ」

「……はぁ子どもみたいに駄々をこねないで下さい。」

「……それじゃあ5巻だけにするから士郎くんも一緒に見よう?」

うっ、そんなうるうる目で見ないでください!

「わかりました。けど五巻だけですよ?」

「わーい!やったゝ」

さすがにそこまで喜ばれるとは思ってなかった。

「それじゃあ俺はお茶の用意をするんで、そっちは任せます。」

「了解!(ビシッ!)」

さくらさんはビシッと敬礼した後コタツに向かい最前線で戦闘準備(DVD鑑賞の準備)をしている。

補給部隊の俺はというと、ただちに支援物資（お茶とお菓子）の準備をしていた。

その後結局26巻全てを見てしまったのは余談だ。

二日目（前書き）

短いですがごめんなさい

二日目

side 士郎

「忘れ物はない？」

カチャカチャと玄関の鍵をかけながら音姫が義之に聞く。

まあ、忘れ物は代々義之がするので、これは信用されていると受けとればいいのだろう。

「あっ！」

「「どうした（の）？」」

「弁当」

弁当？義之は昨日何も言ってきたないし、渉が言うには昼食は代々の割合は購買のパンのはずだが？

「もう、はやく取ってきなさ——って弟くんお弁当だったけ？」

音姫も同じ考えにいたったようだ。

「いや、いつもは違うけど、なんとなく今日は弁当がいいかなって
思っ」

そういうことは昨日の内に言っといてくれればよかったが……今
からじゃあ間違いない無理だぞ？それくらい義之ならわかっている
はずなんだが……

「まゝた、兄さんお姉ちゃんをからかってる」

どこか不満そうな顔している由夢

「そうなのか？」

「うん、ほら見て。」

そこにはカチャカチャと何故か鍵を開けようとしている音姫がいた。

「って、何をしてるんだ音姫？」

「お弁当作ろうと思っ」

そう俺の質問にこたえ腕まくりをしてやる気を出している。

「なんでさ！？今からじゃ間に合わないから！？」

「世の中ね、諦めなければ不可能なことなんてないんだよ？」

「それは確かに俺もその考えには賛同だが今回に限っては無理だ！

物理的に不可能だ！」

「そつだよ音姉、ほら」と携帯で時刻を見せる。

「うー」

と恨めそうに携帯を睨みつける音姫

グイッ！

すると突然制服を引っ張られる。

「うわっと！どうした由夢？」

「行きましたよう士郎さん？」

「いやしかし…」

後ろを振り向くと音姫を必死に説得中の義之がいる。

「あれは兄さんの自業自得です。」

「んゝ由夢、なんとかできないか？」

「む？しょうがないですね」

はあゝとため息を一つ

苦労してるんだろつな由夢

「あの一、お二人で朝からおあつい夫婦漫才をなさるのは結構なん

ですが、先に行っちゃいますよ?」

ニコリ

と、その笑顔には有無を言わせない迫力があつた。

「い、今、行くよ」

スタスタと早足の義之。

わかるぞその気持ち、この笑顔には逆らえないよな。

「あ、ちよつと待ってよー」

前言撤回

若干一名あの笑顔が利かない人がいたよ。

いやはや、あくまはてんしには敵わないんだな

「土郎さん今とても失礼なこと考えませんでしたか?」

「うっ!そ、それじゃ行こう義之」

「そ、そうだな土郎」

「あっ!ちよつと!」

そつして四人並んで新たな通学路を歩き始めた。

「あれ？桜内？それに衛宮？」

ふと、背中に声をかけられる。

振り替えると、そこには委員長こと沢井麻耶がいた。

「うわ、桜内がいるってことは、もしかして……」

委員長はバックから携帯を取り出した。

「あれ？まだ八時にもなってない。
遅れてるのかな……。桜内の時計は？」

「え？俺もそのくらいだけど……？」

「なんだ。びつくりさせないでよね、桜内がいるから遅刻かと思っ
たじゃない。」

「ずいぶんと信用されてるな義之？」

「ああ、そうみたい。つか、俺、そんなに遅刻してないだろ！ま
たく、みんな、よってたかってイメージで判断するな！」

「そう言われればそうかも。それに、朝倉先輩たちがいるから安心
か。」

そう言つて麻耶は俺たちの後ろにいる音姫たちを見て、本当に安心した表情をする。

うん。これっぽちも信用されてないなみたいだぞ、義之？強く生きろよ。俺にはそれしか言えない。

「おはようございます、朝倉先輩ら由夢さん

「うん、おはよー沢井さん」

「おはようございます、沢井先輩。」

なんというか若干一名今まで見たことのない態度をしている人がいる。

いや、待て

この感覚は！？

遠坂と同じ猫かぶり！

「そうか士郎は見るのは初めてだったな………凄いだろ？」

「あ、ああ………しかしあれ以上の猫をかぶっているやつが知り合いにいるから、なれてる。」

「へえーどんな人？」

「んゝ友人の言葉を借りるなら、雌狐だな。」

「雌狐？」

「ああ、猫をかぶるときの早さが尋常じゃない。しかも素を知ってる人からすればあれは猫をかぶるといふより、人格が変わったようにしか思えないんだ。」

「へえゝ上には上がいるんだなゝ」

なんてことを話をしながら由夢を見てみると、ギロリと睨まれた。

「そう言えば、こうやって沢井さんと一緒に学校に行くのは初めてかな？」

「そうですね。多分初めてだと思います。」

音姫と沢井が並んで歩き出す。

よくは知らないがこの組み合わせは新鮮なものらしい

「弟くんや士郎くんは、学校でどう？迷惑とかかけてない？」

「っていきなり何を聞いてるんだよ！」

「だって心配なんだもん。沢井さん、弟くんのクラスの委員長だから、すごく迷惑とかかけてるんじゃないかって」

「義之はなんとなくわかるけど、なぜ俺まで？」

「わかるなよ！」

いや、まったく迷惑かけてないとは言えないだろ？

「大丈夫ですよ。“すごい”迷惑はかけてないですから。」

すごいを少し強調して委員長が俺達二人の方を振り返る。

少しいたずらっぽい顔。

真面目な印象の沢井にしては珍しい表情だった。

「すごい、は無いってことは、それなりに迷惑をかけてるってことですね？」

「まあ、ウチのクラスは問題児の展览会みたいなものだから……せめてもの救いは転校してきた衛宮がまともだったことかしら。」

「ほんと、うちの兄が迷惑をかけて申し訳ないです」

「弟くん、ダメだよ。沢井さんに迷惑かけちゃ」

それから義之に音姫と由夢による説教がはじまった。

「まったく沢井さん、以外といたずらっこだな？」

「あら、私のいたずらなんてうちのクラスの連中……主にその悪の根源三人衆に比べれば可愛いものよ？」

「そうだな、少なくとも学校にいるときよりは可愛いかったよ」

「へ？あ、あら、そ、それは学校では可愛くないってことかしら？」

「え？いや、そういう意味じゃないんだ。学校ではなんだか苛々してる雰囲気だからさ。」

不機嫌というかそんな感じ。」

「そ、そんな不機嫌な顔してるかしら……してる気がするわね。」

「ああ、だからさっきの沢井、笑ってて可愛かった。」

「そ、そそそそ、そんなことないわよ！そんな冗談言わないでよ！」

「いや、本心なんだが？」

「——っな！？あ、ああ、え、衛宮もやっぱり桜内達の仲間ってことね？！」

「な、なんでさ！？」

「こ、これからは貴方も要注意人物に登録しとくからね！」

「え？あ、沢井！」

校門のほうに走って行ってしまった。

「俺、なんか悪いこといったかな？」

二日目（後書き）

次回は少し多目にします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8470m/>

桜咲きほこる島の詩

2011年10月7日15時22分発行